

14年度放射線科の機器更新状況と対応

放射線科技師長 堀 勇 二

この三年ほど、装置の耐用年数もさることながら寿命を迎えつつある大型機器の更新が続いている。特に、画像診断では大きな役割を持っているCT装置、MRI装置と連続して更新してきたが、各診療科での検査要望度も高く、日常診療において欠くことのできない診断装置となっている。また、平成12年に更新されたデジタルX-TV装置も消化器内科がメインとして使用しているが、内視鏡検査をはじめ種々の検査でフル稼働中である。

医療機器は、コンピューターの性能アップが軸となって日進月歩の速さで進化を遂げ、最近では「五年が一昔」を思わせるこの頃である。特に放射線部門の機器は、撮影や透視等大量のデータが発生し、それらのデータ情報を基に、種々の機能やパラメーターを用いデジタル処理を行い、画像を作り上げる。まさにコンピューターの性能により画像の良し悪しが決まってくる。このことによって画像診断は、解剖を熟知していれば身体の臓器や骨等、誰が見ても理解できるような画像情報が得られるようになってきた。また、循環器、脳外科領域では種々の機能検査もできるようになるなど、止まることのない進歩を見せている。

放射線部門は、これからもまだ大型の機器を更新していかなければならない状況にあり、病院の財政事情や他セクションの機器の更新あるいは新規導入など、回りの状況を見ながら時代のニーズに答えるべく漸次進めていきたいと考えている。これら装置の更新や新規導入に伴って、現場ではそのつど研修やトレーニングを実施しながら技師全員が操作できるようにローテーションを組み対応してきているが、最近の装置はコンピューターソフトが半年ほどでバージョンアップされるなど

ソフト開発が非常に進んできており習熟には相当の時間が必要となってきた。

全道市立病院技師長会議でも、いつも出てくる問題として話題になるのが、時間外および休日での当番体制の問題である。特に、医療機関の少ない地域にある市立病院では、当院と同じように地域での役割も大きく24時間体制で取り組む施設も多い。日常の体制を組みつつ時間外及び休日では応援を頼まなければ対応できないことも間々あるのが現状である。これら緊急度の高い検査を要する装置では殆どがコンピューターによって制御されており、検査中に誤操作を起こすことのないよう日頃からのトレーニングに力をいれている。限られた人数の中でローテーションを組み、種々の装置の操作をマスターするには技師間の相互協力、協調による情報交換とチームワークをもったトレーニングが必要となってくるが、当院ではすべての装置をオールラウンドに使いこなすには個人の限界もあり、CT、MRI、RIでは現在専任を一名配置し、他を短い期間でローテーションをしながら個々人のトレーニングを進めている。専任の配置においても二年から三年をめどに配置換えを行い、情報を共有しながら遅れを取ることを無いようミーティング等を通して対応している。現場では、大学病院等大施設のように装置それぞれにスペシャリストとしての希望をする者もいるが、時間外および休日等の対応など当院の役割を考えると、緊急検査には一応全員が対応できる体制が必要であり、現状ではなかなか難しい問題である。これからも新しい装置の開発が行われるであろうし、すべての装置をオールラウンドに操作できることが最終目標であるが、これからもこの問題は放射線科の一番の課題として残ることと思われる。